

本を選ぶ

NO.404 2019年(平成31年)1月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

●<ろん・ぼわん>夜叉五倍子 続

●「あーすぶらざ」見学記

●より「人間らしい」ロボットと、人間自身の理解のために

●好きだったテレビドラマ

●鳥の目 72

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

やしゅぶし 夜叉五倍子 続

この正月の松飾りを一部スワッグにしてみた。松葉に換えてヒムロスギにクジャクヒバ、庭の木から枝を採ったティーツリーやフェイジョア（フトモモ）を加え、わずかな稲穂と控えめに薄い色合いの水引をあしらった至って簡素なもの。少し寂しいので、真白な厚紙の折り襷リースをベースにしたら、丸い形がくっきりと輪郭を整え、緑も冴えてそれなりの恰好がかった。

正月飾りと言えば店先などでよく見掛けるものは、紅白や金銀の水引と松葉に加えてしっかりした緑の葉に赤い実のつく千両や万両も加えて豪華に飾られている。しめ縄と松ぼっくりの組み合わせもある。

正月飾りの王道は門松だろうが、かつてほど見かけなくなった。大きな企業の本社や銀行などの正面玄関で堂々と飾られているが、お値段もそれなりでかなり特別なものとなった。本来は植木屋さんの仕事のようなのだが、近所の鳶職の職人さんたちも稼ぎ時だった。子どもの頃近所のトビのおじいさんに門松の作法について聞かされた記憶がある。雄松と雌松があって左右の置き方があるとか、やれ黒松と赤松の葉をそれぞれ使うのが正しいとか、竹は3本ずつ6本を使うとか、全くうろ

覚えの話だが。

年末に歌舞伎座の前を通りかかったら立派な門松が据えられていたが、竹はすっぱり寸胴に切っていた。切り口を削いだ形が一般的かと思いきやそうでもないらしい。だが、むしろ竹の削ぎ切りの方が気になって道具は何を使うのか調べてみた。道具の本には銚で削ぐとある。なるほどトビのおじいさんも両手で持った刃物を使っていたように思う。

ついでに覗いてみた早川謙之輔の『木工のはなし』（新潮文庫／2002年）に「松」の項があった。ここでも気になったのは松竹梅よりも、冬青の話だ。常緑のきっぱりとした濃い緑の葉に赤い実が正月らしいので、松飾りに添えるとある。そして冬青の英名はhollyだとも言う。字引を引けばなるほど longstalk holly。ならばクリスマスにつきもののセイヨウヒイラギの仲間なのか。

クリスマス飾りに加えてもらおうと旧臘にスワッグを送った友人からこんな礼状が届いた。箱を開けた途端気高い香りが部屋に満ちました。古の人々が常緑樹に感じた生命力に思いを馳せました、と。例年このお宅では年が明けても17日まではツリーも含めてクリスマス飾りを解かないという。長く住んでいたスウェーデンのしきたりになっているとのことだった。クリスマスと新年とが一体となっていて、むしろ現代的である。歳晩でその年を振り返り、明けた新年でこの一年を想う、そんな風に過ごすらしい。まるで小正月までは松の内にするのをつながる話だ。（埜村 太郎）

「あーすぷらざ」見学記

後藤 わか子

9月も中旬とはいえ、まだ暑さの残る某日、横浜市栄区にある「あーすぷらざ」（神奈川県立地球市民かながわプラザ）の見学にうかがった。

「あーすぷらざ」とは

「あーすぷらざ」（神奈川県立地球市民かながわプラザ）は、世界の文化や暮らしについての国際理解や国際平和、地球規模の課題について、日々の生活の中で考え、自分にできる身近なことから行動していくための総合的な施設（パンフレットより）で、「こどもの豊かな感性の育成」「地球市民意識の醸成」「国際活動の支援」の3つを目的としてかかげている。

今回私が見学させていただいたのは、5階まである施設の2階部分にあたる「情報・相談のフロア」の中の「情報フォーラム」と「映像ライブラリー」である。

「情報フォーラム」

まずは情報フォーラム。フロアは「外国人サポートコーナー」にほんご／きょういく／くらし」「地球市民学習コーナー」「市民活動スペース」「フォーラムスペース」に分かれている。

「外国人サポートコーナー」には、学校の教員や日本語教師向けの指導者用図書、子ども向けや大人向けの日本語教材、日本文化を知るための資料、ゴミの出し方や防災についてなど生活全般をサポートするための資料（ファイル状のものが多く）、法律的なものを解説する図書資料などあらゆる資料が揃えられている。なかにはイラストカード状のものもあり、特別支援学級で使っているものを流用しているとのこと、わかりやすいように工夫がこらされている。

「地球市民学習コーナー」は、国際理解・環境・人権・平和・情報・多文化共生・国際協力の7つのテーマに分類した図書や視聴覚資料が置かれている。よりテーマをわかりやすくするため、すぐ

ろくやゲームのかたちをとっている資料もあった。

これらの資料は神奈川県在住・在勤・在学であれば貸出を受けることができ（1人6冊3週間まで）、学校の授業や市民活動の勉強会に活用されている。教員研修の受入も行っているとのことだ。

「市民活動スペース」は資料の閲覧、ミーティング、軽作業などにフリーで使え、「フォーラムスペース」は登録・予約制で市民団体が活動する場となっている。場所柄、各種言語の語学教室での使用が多いとのこと。

スペースの傍らには市民活動支援コーナーがあり、国内外で活躍するNPO／NGOや市民団体のニュースレターを閲覧することができる。

情報フォーラムの入口には、「あーすぷらざ外国人教育相談窓口」があり、おもに外国人の学習者に向けて、学校での学習や日本語についてなどの相談を行っている。

対応言語は、中国語／タガログ語／スペイン語／ポルトガル語で、訪問した日はタガログ語での相談の予約が入っていた。

タガログ語と聞いて一瞬使っている国が思いつかなかったのだが、フィリピンの公用語と聞いて納得した。

フォーラムの奥には、暮らし全般・法律に係る「外国籍県民相談窓口」があり、在留資格・労働・年金についてや、弁護士による相談はこちらで行われている（対応言語は英語／中国語／韓国・朝鮮語／スペイン語／ポルトガル語）。

「映像ライブラリー」

「映像ライブラリー」は「情報フォーラム」の隣に位置し、フロア構成はビデオ・DVDの視聴席、図書・雑誌などの閲覧席を囲むかたちで、一般図書、雑誌、子どもの本、ビデオ・DVDが配置されている。蔵書は「情報フォーラム」と合わせてビデオ・DVD（視聴のみ）が約3,000点、図書が約37,000冊、雑誌（閲覧のみ）約150種とのことであっ



たが、3分の2の資料はこちらにあるという印象で、図書館らしい感じがあった。

子どもの本のコーナーでは、毎月第3日曜日の13時から「世界一周多言語読み聞かせの旅」という外国語と日本語で同じ絵本の読み聞かせをする催しがあり、2017年にLAS探検隊が『子どもの本を選ぶ 小学校版』(No.27)でこの模様をレポートしているが、その時22回目だったこの催しも私がうかがった9月には40回目を迎えており、息の長い活動として定着していることがうかがわれた。

子どもたちの学びの場

今回はさらっと見せていただくだけにとどまったのだが、5階は「体感・発見のフロア」ということで、「こどもの国際理解展示室」「国際平和展示室」などの視覚的に国際理解、国際平和について学べる場所となっている。

「こどもの国際理解展示室」には、実際に入ってみたり乗ったりすることのできる他国の家や乗り物の模型があったり、民族楽器や民族衣装もあって、こちらも実際にたたいてみたり、着てみたりできるようになっているようだ。

「あーすぷらざ」では、児童生徒に国際理解を促すためであるとか、在学している外国籍の子どもたちが円滑な学校生活を送るためにはどのようなサポートをしたらよいかということに対する相談の受付など学校に対する支援を、パンフレット等を作成してPRしている。

たとえば、5階の子どもの国際理解展示室や国

際平和展示室などで視覚的な学習をした後に2階のライブラリーの資料を使って調べ学習を行うなどの校外学習プランを提示したり、情報フォーラム内の外国人サポートコーナーに、学校から家庭への通知文の翻訳集、日本の学校生活を説明する翻訳資料、各教科の日本の教科書や学習補助教材、進学ガイドブックなど外国人児童生徒の教育支援に役立つ資料を揃えたりしている。

東京オリンピックを2年後に控え、各自治体では多文化共生の機運が高まってきていると思われる。そんな中で「あーすぷらざ」が神奈川県として取り組みを行っていることは先進的であると思うし、自分の勤務先でもこのような取り組みを図書館として行っていければと思う。

今回の見学では、司書の方に大変お世話になったのだが、利用者がどのような資料を求めているか気を配り、選書はもちろんのこと、利用者が探しやすい、手に取りやすいように工夫をされているというのは、やはり図書館司書という専門職ならではの仕事で、ここでは利用者が必要としている資料を結びつけるということに切実な部分があると思うので、なおさら大事な役割を担っているのだなと痛感した。

(ごとう わかこ：世田谷区立烏山図書館)

《利用案内》

開室時間：情報フォーラム 9:00～20:00(平日)
9:00～17:00(土日祝)

映像ライブラリー 9:00～17:00

休室日：月曜日(祝祭日は開室) 年末年始

電話：情報フォーラム 045-896-2976

映像ライブラリー 045-896-2977

所在地：〒247-0007

神奈川県栄区小菅ヶ谷1-2-1

JR根岸線本郷台駅徒歩3分

URL：<http://www.earthplaza.jp>

より「人間らしい」ロボットと、人間自身の理解のために

—『発達ロボティクスハンドブック』—

榎本 統太

ロボットや人工知能がニュースにならない日はありません。おなじみのPepperをはじめとして、人間とともに生活し、自分で考えて行動し、人と対話できる賢い、言葉を変えればより「人間らしい」ロボットの登場が期待されています。

「人間らしい」とは何でしょうか？ 生まれたばかりの赤ちゃんを考えてみましょう。はじめは何もできなかった赤ちゃんが、手足を動かし、目が見えるようになり、手でものをつかみ、ハイハイをして立ち上がり、言葉を話し出す。生まれてわずか2年ほどの間に行われるこのプロセス——「発達」にこそ、ヒトを人間らしくする秘密があります。しかしもっとも不思議なのは、この発達は誰に教わることなく、ひとりで起こるという点です。

人工知能研究で主流となっているディープ・ラーニングの多くは、人工知能が学ぶべき教材を人間が大量に準備して、コンピュータがそのデータを解析して学習する「教師あり学習」という方法を採用しています。人間よりはるかに強くなった囲碁や将棋の人工知能でも、基本的なルールは人間が教えなければなりません。

ところが、人間や動物の発達には「教師」がいりません。赤ちゃんがさまざまな能力を獲得する過程は、赤ちゃんにあらかじめ備わっている仕組み、それだけで進んでいくのです。赤ちゃんは自分の力でまわりの環境を認識して理解し、誰に教わらずともまわりの世界に対して活動を始めます。

赤ちゃんにガラガラを手渡すと、赤ちゃんは最初目的もなくただ振り回すだけですが、すぐにガラガラを振ると音がすることに気づき、喜んでより大きな音が鳴るように振りはじめます。このとき、赤ちゃんの中では次の2つのことが起こっているようなのです。

①手に触れるもの（ガラガラ）と、聞こえてくるもの（ガラガラが出す音）と、見えているもの（ガラガラの形）の関係に気づく。

②ガラガラを自分の思うように動かせるようになる。

赤ちゃんの中で触覚と聴覚と視覚と運動がひとつに組み合わせあって、「ガラガラを振る」という行為が成立します。このような、複数の感覚や能力の組み合わせが「発達」の鍵だと考えられています。

では、どうしたら人間の発達を理解できるのでしょうか？ そのひとつに、人間と同じような仕組みで動くロボットを作って、ロボットに発達の過程を真似させるという方法があります。人間の幼児が行うさまざまな行動をロボットにやらせてみて、その試行錯誤のデータを集めればより「人間らしい」ロボットが作れるのではないか、その過程でより本質的な人間理解も進むのではないかとはいえます。これが「発達ロボティクス」という研究分野です。

本書では、誕生から2歳程度までに子どもが身につける能力の中から「好奇心」「視覚」「運動」「社会性」「ことば」「抽象的思考」の6つのテーマを選んで、それぞれについてこれまでの発達心理学の知見と、それにもとづいたロボットの製作、そして実験の概要が紹介されています。心理学とロボット工学が融合した研究分野として、どちらに関心がある読者が読んでも役に立ち、かつ実践に活かせる内容となっています。「複雑系」や「創発」といったキーワードが気になる人にも興味深く読めるでしょう。学際化が進むロボット・人工知能研究の新しい潮流を、本書は教えてくれています。

(えのもと とうた:福村出版)



『発達ロボティクスハンドブック』／アンジェロ・カンジェロシ他著／B5判上製／416頁／定価（本体11,000円＋税）／2019年1月刊行／福村出版

好きだったテレビドラマ

何年も前の話題で恐縮だが、以前テレビで『素敵な選TAXI』というドラマを観た。竹之内豊扮するタクシー運転手が運転するタクシーに乗ると時間を逆もどりしてやりなおすことができるというドラマだ。いうなればタイムマシーン。私はそのタイムマシーンが、いかにも誰にでも、馴染みのあるタクシーに仕立ててあるところが気に入っており、タクシーの運転手の怪しげな振る舞いと渋い声、ストーリーの面白さにはまってしまった。

人は皆、いつもなにか、選択をしながら生きている。たまたま偶然起こってしまった運命も、あのかき曲がったのが左だったら…、あんなことしなければ…、云々。もしも〇〇だったらという思いは、誰でも一度は考える感情でもある。嗚呼、あの時に戻れたら、今度はこうするのに…と人は選択を失敗したと思う時に考える。だがこうしたら成功するという答えは果たしてあるのだろうか。本当の正解なんて、実は一つもないのかもと思う。誰にとっての正解か。最終的にはその人自身にとってのということか。

しかしそこには、他者の選択も加わって影響をあたえてくるわけである。人は一人では生きていないし、また予期しない災害にも出くわすだろう。色んな人生や物事が絡み合い、実際にはその先のストーリーはどこまでも続いてゆく。すぐに答えなんか出ないのが人生ともいえるだろう。もしかしてずっとあとになって答えが出ることの方が多いかもしれない。

もしも今、過ぎてきた時間をやり直すことが出来るとしたら…どのくらいの人がそれを実行するだろう。私は、同じ時間を何度も繰り返したくはないと考えそう。でも本音を言うと、ちょっとだけ戻ってみたい場面が思い浮かぶ。それは、ある作家さんのアトリエに編集担当者の代理で絵を受け取りに行ったときのこと。この本の企画を持ち込んでくれたフリーの編集者と二人で絵を受け取り、傷まないように一緒に保護紙に包み、それ

をケースに入れて持ち帰ろうとしたその時、作家のSさんは私たちを、お茶に誘ってくださった。「コーヒーを淹れるよ」と。しかしその日、原画を少しでも早くに持ち帰る必要があった。お茶をしたい気持ちを抑え、せっかくですが…とその日はそのまま社に戻った。

そしてその本が出来上がり、その数年後、その作家さんは亡くなられてしまった。今も、あの時、一緒に淹れてくださったお茶を飲んだのなら、どんな話をしていたかな、と考える。もしも時間を戻すとしたらその時に戻ってそうしてみたい。でも、一方で思う。もしもそのことを選んでいたら、今その時のことをそんなに鮮明に覚えているかなあと。いくつもの一瞬の積み重ねの上にある今。他の判断では今の気持ちには繋がらなかっただろう。それどころか予定の仕事が終わらず、嫌な思い出になったかもしれない。

ドラマの話にもどるが、人は失敗した！と思っただけでどうにか取り繕いたいと思ってしまう生き物なのだ。ドラマをみてつくづく思った。そして失敗の直後にそんな誘惑があったら…うっかり乗っかってしまうかもしれない生き物なのだ。私自身、今は、そんなことしないつもりでいても、いざとなったら、どうなるか…。実際にはドラマのように時間は戻らないけれど、経験したことが次にいかせるのだったら選タクシーに乗ったも同じ(?)。良いことも悪いことも、全ては未来の自分へのお土産と置いていさぎよく今を終えていけたらいいなあと思う。

それにしても今の子どもは選択肢が多くて大変そう。ランドセルなんか今は色もトリドリ。私の子どもの頃は男は黒、女は赤のほとんど2色。違う色といえば私立に通う子達の茶色。選択肢がないにもほどがあるが、なければ別にほしくもないわけだ。つい先日、小学生の頃の遠足の写真をみたら一緒にお昼を食べていた友人たちのリュックもみんな赤！びっくりたまげてしまった。

(みぞかみ まきこ：朔北社)

鳥の目 72

—渡り鳥から学ぶ ～唐土の鳥は～—

為貞 貞人

渡り鳥がどこからきて、どこへ行くのかヨーロッパでは古代から中世を通して大きな謎だったのですが、島国である日本では鳥が海を渡って飛んでくるという認識が比較的早くからあったと思われます。

その一つが日本の各地で正月7日に食べる七草がゆを作るときのはやし歌に見られます。七草がゆを食べる風習は平安時代半ば中国から伝わった季節の行事の一つで、7つの菜を6日の晩にまな板の上でトントンと叩きながら「七草なずな 唐土の鳥が日本の土地に渡らぬ先に七草なずな」と歌われます。疫病神は外から来るもので、唐土（中国—外界）から鳥が邪気や疫病を運んでくるという考えに基づいていたようです。注目したのは、鳥の飛来についての認識が早くからあったことですが、問題はこの認識がどの程度鳥の渡りについての理解につながっていたかということです。

鳥類学者の樋口広芳さんは鳥の渡りについて、「鳥は飛ぶことを生かして長距離の季節の移動をします。毎年秋に北の繁殖地を離れて南の越冬地に向かいます、春には越冬地から北の繁殖地へ戻ります。こうした鳥の季節的な移動を“鳥の渡り”といいます」と簡潔明快に書いています。『鳥ってすごい』山と溪谷社／2016)

鳥の渡りで重要なのは、渡って行って必ず帰ってくることです。人間が鳥の渡りをもじって「渡り」の言葉を使いますが、根本的な違いは人間の「渡り」は多くが行きっぱなしだということです。鳥の渡りは必ず繁殖地へ戻ってきます。それが種の存続を可能にする唯一の方法だからです。

そのため、私たちが鳥の渡りを理解するということは、鳥の飛来だけでなく、鳥が去って行くことも理解することです。しかし不思議なことに日本語には「飛来」はあっても「飛び去って行く」という言葉がありません。最近、ある鳥の本で「飛去」との造語を目にしたことがあります。本来言語は人間の歴史的な思考回路を表現したもので

すから、その言葉がないことは、簡単に言えばそのことを考えてこなかったということではないでしょうか。ただし、ガンにだけには「帰雁」という言葉があり救われた気持ちです。

冬鳥はロシアから

鳥の渡りは南極と北極を挟んで世界地図に国境を超えたさまざまな形の線を描きます。日本はユーラシア大陸に沿って、北海道から琉球列島まで東西に広がり、北緯20度の沖ノ鳥島から45度の宗谷岬まで南北にも長く、北極圏、シベリアと中国大陸、マレーシア、フィリピン、オーストラリアなど、ユーラシア北部から太平洋を行き来する渡り鳥の絶好の越冬地や中継地になっています。

日本の留鳥と渡り鳥との比率を見ると、本州、四国、九州は留鳥40%、渡り鳥60%、北海道と琉球列島は留鳥20%、渡り鳥80%で、渡り鳥が圧倒的に優位を占めています。

世界には9000種の鳥が生息しますが、水鳥はその10%に過ぎず、水鳥は渡り鳥に多いことを考えれば、日本の渡り鳥の比率がいかに高いかが分かります。

日本の渡り鳥、特に冬鳥や旅鳥は多くがロシアで繁殖します。A・B・ミヘーエフの『鳥の渡り』（モスクワ「森林産業」刊／1981）によれば、ロシアの寒冷な緯度地帯に生息するすべての鳥は、何らかの季節の移動を行います。いわゆる留鳥と呼ばれる鳥は全種類の3分の1程度です。ロシア国内で見られる鳥の種類は約740種以上（大図解百科『ロシアの鳥—ヨーロッパ、シベリアおよび極東』《Bestiary》刊／2013）で、そのうち渡り鳥は約500種です。また日本へ渡るロシアからの冬鳥は15科75種以上が知られています（中村司著『渡り鳥の世界』山梨日日新聞社／2017）

渡り鳥の約半数が亜熱帯の最南端や熱帯、また南半球の温暖な地方で越冬し、渡りの距離は長いものは1万キロ以上に及びます。渡り鳥の大部分

が群れで渡り、ロシアでは渡り鳥の73%、漂鳥の67%が群れをつくります（ミヘーエフ）。

群れの「論理」

鳥の群れについて、動物行動学などでいろいろ論じられていると思いますが、一般に日本では「大群」「小群」といった数量上の区別で鳥の群れを表現しています。しかしロシアではスターヤ（с т а я）とスコプレーニエ（с к о п л е н и е）といった群れの性格を表現する用語が使われています。日本の各露和辞典では前者は「同（一）種の動物群」「動物、殊に魚鳥の群れ」、後者は「（人や物の）群れ」「群、群集」「大群」とあり、内容上の明確な区別がほとんどつきません。

しかし、ロシアでは鳥の群れが、家族（親のつがいと若鳥）を中心にした同一種のグループ、ハクチョウでは3羽から200羽をスターヤと呼び、スターヤが集合し他種のスターヤも含めた大群をスコプレーニエと呼んでいます。千羽を超え数千羽になった群れは、いくつかのスコプレーニエからなったものです。（『北サハリンの水辺の鳥』ロシア科学アカデミー極東支部生物学・土壌学研究所／2011）

このようにロシア語の鳥の群れの表現の豊かさは、私はロシアが渡り鳥の繁殖地ならではの人と鳥

との密接な関係から生まれたものだと考えます。

同じことは鳥の「渡り」を表す言葉の多様さでも言えます。

渡り鳥は繁殖時は分散しますが、渡りと越冬は集団で行います。群れの形成は、渡り鳥が豊かな餌場と安全な休息場所や飛行ルートを確保するためであり、一羽の仲間も置き去りにしないことがスターヤの原則です。

秋、ガン、カモ、ハクチョウだけでも170万羽以上（環境省「平成24年度ガンカモ類生態調査」）の渡りの大群が、迫りくる極寒のシベリアや極東をあとに、カムチャツカ半島やマカダン地方を經由して一部はオホーツク海を渡り、北サハリンの湾や干潟を中継地とし、また一部は千島列島の島々を渡って北海道を目指し、奔流になって日本列島になだれ込む様子を想像してみてください。

そこに豊かな自然があることをロシアの渡り鳥が知っているからです。日本で越冬する冬鳥も、南方から繁殖に里帰りする夏鳥も、日本を中継して北極圏を目指す旅鳥も、かけがえのない日本列島を忘れません。この鳥たちをいつまでも「けふよりは 日本の雁ぞ 楽に寝よ」（一茶）と胸を張って迎えたいものです。

（ためさだ さだと：さいたま市図書館友の会）